

2025年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2026年9月

和洋女子大学

目次

1. はじめに	3
2. 授業評価実施概要	4
3. 評価	5
4. 総括	5
(1) 全学授業評価結果の概要	5
1) 教員の授業設計と運営について	10
2) 出席率の高低群と授業評価について	11
3) 授業形態別による評価	13
(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題	15
1) 共通総合科目の課題（教務部門長 多賀昌樹）	18
2) 日本文学文化学科の専門科目の課題（学科長 小野 真嗣）	20
3) 心理学科の専門科目の課題（学科長 佐瀬竜一）	21
4) こども発達学科の専門科目の課題（学科長 大神優子）	22
5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題（学科長 河内山有佐）	23
6) 国際学科の専門科目の課題（学科長 金丸裕志）	24
7) 服飾造形学科の専門科目の課題（学科長 水野一枝）	25
8) 健康栄養学科の専門科目の課題（学科長 杉浦令子）	26
9) 家政福祉学科の専門科目の課題（学科長 水野一枝）	26
10) 看護学科の専門科目の課題（学科長 大堀昇）	27
5. 資料	30

1. はじめに

2025年2月に、中央教育審議会は「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」を公表した。急速な少子化をはじめとした国内外の諸情勢の急激な変化を踏まえ、「高等教育機関の目指すべき姿とは、我が国の「知の総和」を向上させることである。」と示し、「「知の総和」の向上のためには、教育研究の質を上げ、社会的に適切な規模の高等教育機会を確保し、地理的・社会経済的な観点からのアクセス確保によって高等教育の機会均等の実現を図ることが必要であり、このことが高等教育政策の目的となる。」とまとめている。更に、2026年6月には、中央教育審議会に設置されている「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ」での議論がまとめられ、新たな評価制度が公表された。本学においては、建学の精神に基づく教育理念を実現し、学生の成長を促す教育を提供するために教育研究の「質」の向上への不断の取り組みを推進することが肝要と考える。

本学では、内部質保証（大学が自ら行う教育研究の質の改善に向けた組織的な活動）をアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程・編成実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の適切性としてとらえ、そこに定める内容の評価することを目的として、アセスメント・ポリシー（評価方針）を定めている。アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つのポリシーを評価するために、「入学前・入学直後」、「在学中（単位認定・進級判定）」、「卒業時（卒業後）」の各時期に、「大学（機関）レベル」、「学部・学科（教育課程）レベル」、「授業科目レベル」の3つのレベル（水準）を設定し、各水準において入学前学生アンケート、学生生活アンケート、プレイスメントテスト、GPA(Grade Point Average)、授業評価アンケートなどを用いて評価を行い、課題を抽出し、改善を行うというPDCAサイクルを回している。また、授業評価アンケートは教員が自らの講義の質を客観的に点検し、改善を目指すため取り組みにも活用されている。

本報告書では、授業評価アンケートを活用した「授業科目レベル」の評価結果をまとめている。本報告書が、授業改善に向けた教員の努力と学生の積極的な学びの姿勢を結び付け、より実りある教育環境を築く一助となることを心から願うものである。

末筆ながら、調査にご協力をいただいた学生諸氏と、結果の分析と評価に多大なご尽力をいただいた教職員の皆様に心から感謝の意を申し上げたい。

和洋女子大学 学長
熊谷優子

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2025年7月9日(水)～7月31日(木)、後期開設科目及び通年開設科目については2025年12月23日(火)～2026年1月31日(土)の期間中に実施した。なお、各期の前半科目は5～6月と10月～11月に実施した。

2025年度の開設科目は、前期740科目、後期699科目、通年87科目、前期集中25科目、後期集中25科目、通年集中119科目で、合計1,695科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、受講者数10人以下の科目を除いた合計1,058科目で、全開講科目の62.4%に相当する。

評価は、manaba courseの自動アンケート機能を利用したWEB回答方式のアンケートで実施し、各授業科目について評価と自由記述を学生に入力させた。アンケートの設問は巻末「2024年度授業評価アンケート設問」のとおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価、学びの目標(ディプロマ・ポリシー)における自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強くそう思う」、4は「そう思う」、3は「どちらでもない」、2は「そう思わない」、1は「全くそう思わない」、0は「該当しない・答えたくない※集計の平均値には含めない」を示しているが、Q24のみ5は「とても満足」、4は「満足」、3は「どちらでもない」で同様、2は「やや不満足」、1は「不満」、0も同様に「該当しない・答えたくない※集計の平均値には含めない」を示している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時の15分程度を利用し、原則として科目担当教員がアンケートの指示を出し、教員が教室を退室した後、スマートフォン等で回答入力を学生自身が行なった。メディア授業(遠隔オンデマンド)で開講された科目については、最終授業時または最終課題を提示した時にmanaba courseの各科目コース内で科目担当教員が指示を掲載し、指示から回答までに1週間程度の猶予を設け実施した。科目担当教員は授業科目毎のアンケートデータをmanaba courseでいつでも確認ができ、教員毎の結果は業者に委託して集計され別途通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・教育活動の振り返りなどについて、全担当科目を総括してティーチング・ポートフォリオを作成した。この文書はmanaba courseにて教員が閲覧することができ、学内において相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 評価

年間の教員別総合満足度の順位を公表する（ただし、オムニバス科目は反映しない、非常勤講師は除く）。高評価であった以下 10 名は 2026 年 4 月 7 日付全学部教授会において表彰された。

順位	総合満足度 pt.*	所属	教員名 (敬称略)
1	4.89	英語コミュニケーション学科	内田 翔大
2	4.88	服飾造形学科	水野 一枝
3	4.82	こども発達学科	上村 明
4	4.80	看護学科	石川 紀子
5	4.7971	英語コミュニケーション学科	河内山 有佐
6	4.7969	心理学科	佐瀬 竜一
7	4.787	全学教育センター	塚原 望
8	4.786	健康栄養学科	布川 美穂
9	4.778	日本文学文化学科	中村 拓也
10	4.768	看護学科	金屋 佑子

*総合満足度 pt. は 5 点満点

4. 総括

2025 年度は、COVID-19 後の授業体制が定着し、多くの科目が面接授業を主体とする一方で、メディア授業（遠隔オンデマンド）も一定数実施された。授業評価アンケートは、2021 年度からの設問構成を踏襲しつつ、今年度も大学教育の質保証を可視化する目的で実施された。学生自身が 4 年間の学びの目標となる大学のディプロマ・ポリシーを意識するよう評価項目に示し、教育の中でも中心を占める授業がそれに応えられているのかを質問した。質問項目は、「Q18 学びの目標達成に近づいた」、「Q19 自分を知り誇りを持つ力が向上した」、「Q20 基礎学力と文章力が向上した」、「Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した」、「Q22 課題を解決する力が向上した」、「Q23 社会に役立つ専門力が向上した」の 6 つの設問を通じて、授業がその達成にどの程度寄与しているかを評価した。

（1）全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示す。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが図 1 である。また、授業形態別の評価結果を図 1①②に示した。

授業アンケート結果集計表

【授業】全体				
履修者数			44437名	
回収数			24265名	
回収率			54.6%	

	対面のみ	対面と 選開	対面授業 (選開のみ)	対面授業 (選開のみ)	その他
Q1.授業開講方法	21453	0	0	2812	0

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q2.シラバスに沿っていた	12572	10295	1073	192	55	78	4.45
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	12622	9915	1299	285	104	40	4.43
Q4.新しい知識・技術を学べた	13530	9378	1002	224	89	42	4.49
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	11441	9646	2201	607	211	159	4.31
Q6.教材が理解に役立った	12262	9813	1608	334	127	121	4.40
Q7.説明がわかりやすかった	11419	9882	2067	626	218	53	4.31
Q8.質問できる時間や環境があった	10872	9914	2546	531	180	222	4.28
Q9.質問への対応が適切だった	10647	9670	2726	337	160	725	4.29
Q10.出席確認の方法が適切だった	13851	8737	1209	312	100	56	4.48
Q11.運営時間、学習量が適切だった	11051	10676	1775	540	153	70	4.32
Q12.教員の熱意を感じた	12577	9690	1558	271	102	67	4.42
Q13.積極的に意見や質問をした	7567	7826	5158	2188	799	727	3.81
Q14.よく出席・参加した	15010	7575	1279	270	69	62	4.54
Q15.自己学習の時間を確保した	8921	10445	3382	1016	275	226	4.11
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	11917	10067	1724	277	72	208	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	9947	10755	2636	606	219	102	4.23
Q18.学びの目標達成に近づいた	10249	10830	2416	448	167	155	4.27
Q19.自分を誇り誇りを持つ力が向上した	8369	9722	4257	979	313	625	4.05
Q20.基礎学力と文章力が向上した	8727	10835	3261	675	243	524	4.14
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	8755	10248	3632	779	264	587	4.12
Q22.課題を解決する力が向上した	9057	10948	3058	580	203	419	4.18
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	10173	10623	2562	441	172	294	4.26
Q24.授業の総合満足度	13213	8911	1523	348	175	95	4.43

【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布

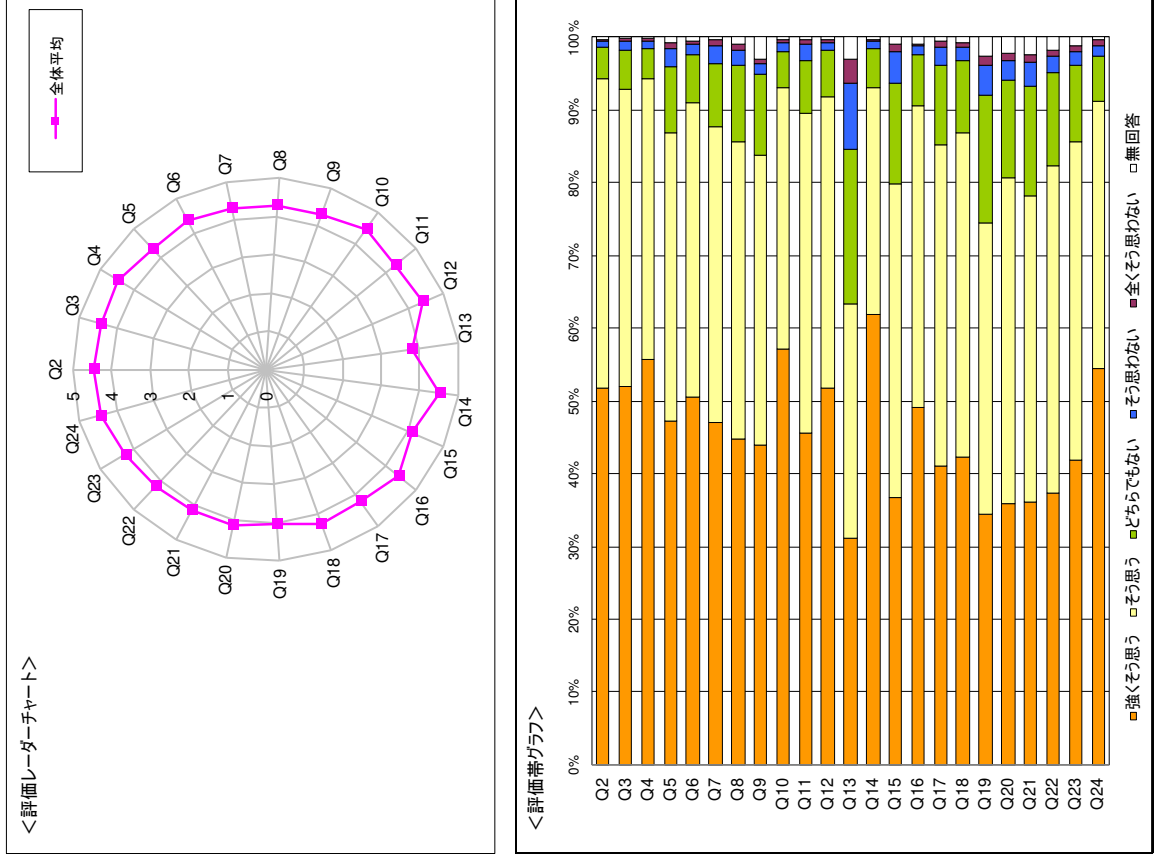
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	12204	9206	905	193	61	16	4.48
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	11089	9004	1735	486	145	126	4.36
Q6.教材が理解に役立った	11882	9097	1187	253	77	89	4.45
Q7.説明がわかりやすかった	11072	9228	1613	497	147	28	4.36

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2.1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	411	688	389	87	38	5	3.84
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	347	623	457	115	63	13	3.67
Q6.教材が理解に役立った	373	698	415	77	44	11	3.80
Q7.説明がわかりやすかった	344	633	449	124	63	5	3.66

図 1 全体の概要

2025年度通期 和洋女子大学



授業アンケート結果集計表

キャンパス		曜日	履修者数
学部		時間	回収数
科目		対面授業のみ	
教員		回収率	

Q1.授業開講方法	対面のみ	対面と 遠隔				対面授業 (遠隔7分4 分)兼リ オンのみ				その他	
		5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均		

項目別回答分布(人数と平均値)											
Q2.シラバスに沿っていた	11149	9091	926	171	52	64	4.45	4.46			
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	11235	8718	1131	249	87	33	4.44	4.45			
Q4.新しい知識・技術を学べた	12026	8254	868	194	77	34	4.49	4.52			
Q5.理解度に合わせた授業を進めた	10434	8537	1716	519	195	52	4.33	4.28			
Q6.教材が理解に役立った	10835	8667	1428	300	112	111	4.40	4.40			
Q7.説明がわかりやすかった	10188	8644	1817	564	201	39	4.31	4.30			
Q8.質問できる時間や環境があった	9938	8734	2049	445	159	128	4.31	4.27			
Q9.質問への対応が適切だった	9749	8603	2158	290	145	508	4.31	4.26			
Q10.出席確認の方法が適切だった	12505	7533	1029	259	88	39	4.50	4.50			
Q11.運営時間、学習量が適切だった	9870	9379	1540	478	132	54	4.33	4.31			
Q12.教員の熱意を感じた	11302	8453	1310	239	95	54	4.43	4.39			
Q13.積極的に意見や質問をした	6885	7067	4444	1877	664	516	3.84	3.89			
Q14.よく出席・参加した	13301	6702	1116	232	58	44	4.54	4.56			
Q15.自己学習の時間を確保した	8008	9267	2920	850	224	184	4.13	4.17			
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	10504	8917	1536	243	62	191	4.39	4.42			
Q17.さらに勉強したくなった	8835	9490	2335	517	187	89	4.23	4.29			
Q18.学びの目標達成に近づいた	9238	9587	2003	364	141	120	4.29	4.34			
Q19.自分を誇り誇りを持つ力が向上した	7416	8596	3736	871	281	553	4.05	4.14			
Q20.基礎学力と文章力が向上した	7818	9550	2820	587	219	459	4.15	4.19			
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	7760	9061	3176	696	239	521	4.12	4.22			
Q22.課題を解決する力が向上した	8072	9650	2677	509	181	364	4.18	4.26			
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	9086	9382	2198	386	152	249	4.27	4.35			
Q24.授業の総合満足度	11771	7817	1313	311	163	78	4.44	4.42			

【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布

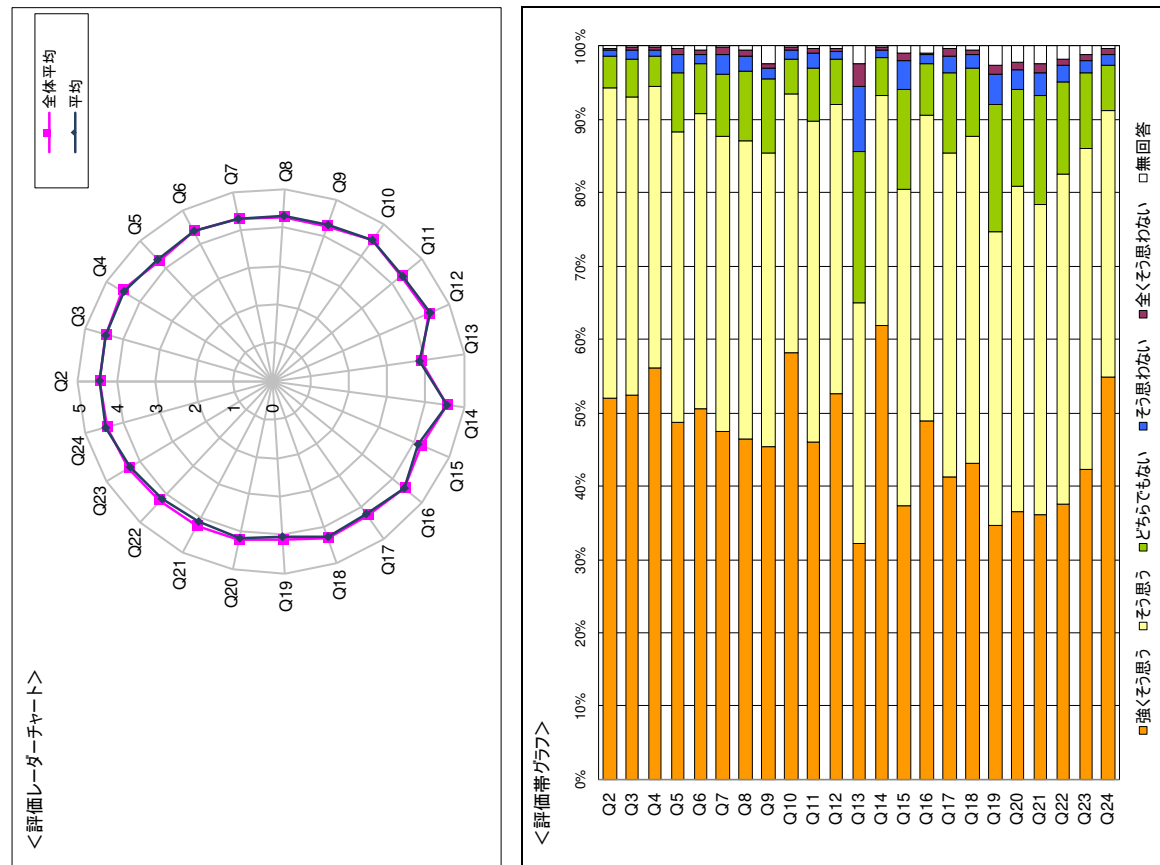
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	Q5.理解度に合わせた授業を進めた	Q6.教材が理解に役立った	Q7.説明がわかりやすかった	5 4 3 2 1				無回答	平均
				5	4	3	2	1	
10856	8106	806	169	50	16	4.48			
10107	7972	1341	416	132	35	4.38			
10489	8062	1064	231	71	86	4.44			
9875	8087	1428	453	140	20	4.36			

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2・1)の回答分布

Q3.内容は知的刺激に富んでいた	Q5.理解度に合わせた授業を進めた	Q6.教材が理解に役立った	Q7.説明がわかりやすかった	5 4 3 2 1				無回答	平均
				5	4	3	2	1	
372	598	322	75	34	5	3.86			
322	549	369	101	60	5	3.69			
339	592	360	66	38	11	3.81			
310	541	386	108	56	5	3.67			

図 1 ①面接授業のみの結果

2025年度通期 和洋女子大学



授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	曜日	履修者数
学部	時間		回収数
科目	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ		回収率
教員			

	対面のみのみ	対面と遠隔	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他
Q1.授業開講方法	0	0	0	2812
項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2

	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q2.シラバスに沿っていた	1423	1204	147	21	3	14	4.44	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	1387	1197	168	36	17	7	4.39	4.45
Q4.新しい知識・技術を学べた	1504	1124	134	30	12	8	4.45	4.52
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	1007	1109	485	88	16	107	4.11	4.28
Q6.教材が理解に役立った	1427	1146	180	34	15	10	4.40	4.40
Q7.説明がわかりやすかった	1231	1238	250	62	17	14	4.29	4.30
Q8.質問できる時間や環境があった	934	1180	497	86	21	94	4.07	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	898	1067	568	47	15	217	4.07	4.26
Q10.出席確認の方法が適切だった	1346	1204	180	53	12	17	4.37	4.50
Q11.運営時間、学習量が適切だった	1181	1297	235	62	21	16	4.27	4.31
Q12.教員の熱意を感じた	1275	1237	248	32	7	13	4.34	4.39
Q13.積極的に意見や質問をした	682	759	714	311	135	211	3.59	3.89
Q14.よく出席・参加した	1709	873	163	38	11	18	4.51	4.56
Q15.自己学習の時間を確保した	913	1178	462	166	51	42	3.99	4.17
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	1413	1150	188	34	10	17	4.40	4.42
Q17.さらに勉強したくなった	1112	1265	301	89	32	13	4.19	4.29
Q18.学びの目標達成に近づいた	1011	1243	413	84	26	35	4.13	4.34
Q19.自分を知り誇りを持つ力が向上した	953	1126	521	108	32	72	4.04	4.14
Q20.基礎学力と文章力が向上した	909	1285	441	88	24	65	4.08	4.19
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	995	1187	456	83	25	66	4.11	4.22
Q22.課題を解決する力が向上した	985	1298	381	71	22	55	4.14	4.26
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	1087	1241	364	55	20	45	4.20	4.35
Q24.授業の総合満足度	1442	1094	210	37	12	17	4.40	4.42

【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布

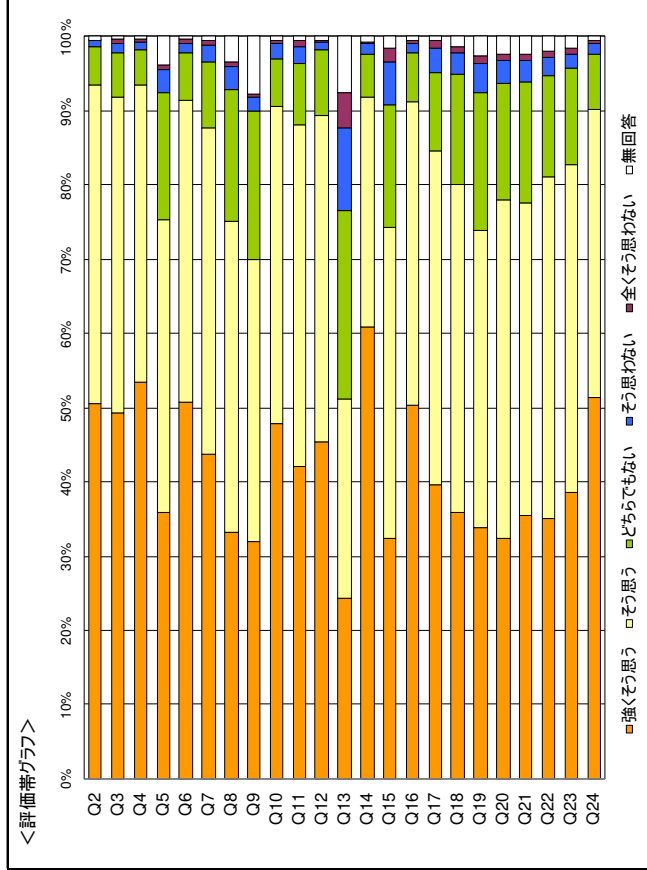
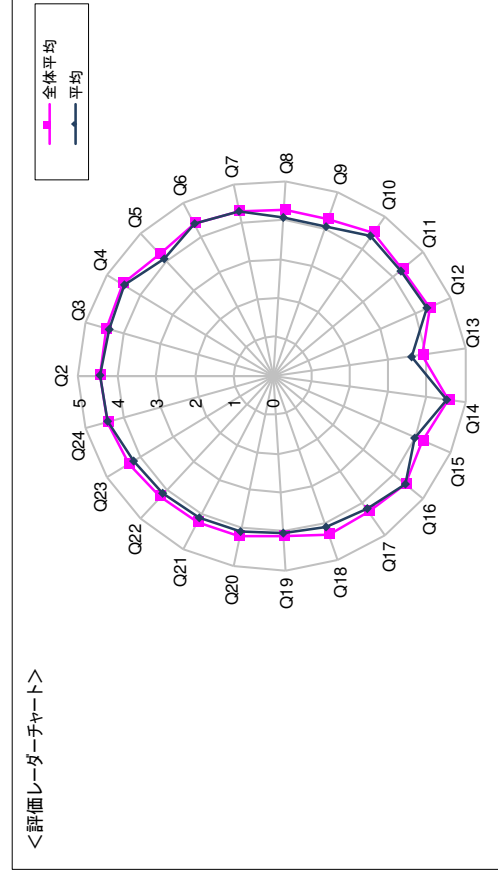
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	1348	1100	99	24	11	0	4.45
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	982	1032	394	70	13	91	4.16
Q6.教材が理解に役立った	1393	1035	123	22	6	3	4.47
Q7.説明がわかりやすかった	1197	1141	185	44	7	8	4.35

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2.1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	39	90	67	12	4	0	3.70
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	25	74	88	14	3	8	3.51
Q6.教材が理解に役立った	34	106	55	11	6	0	3.71
Q7.説明がわかりやすかった	34	92	63	16	7	0	3.61

図1 ②メディア授業(遠隔オンデマンド)のみの結果

2025年度通期 和洋女子大学

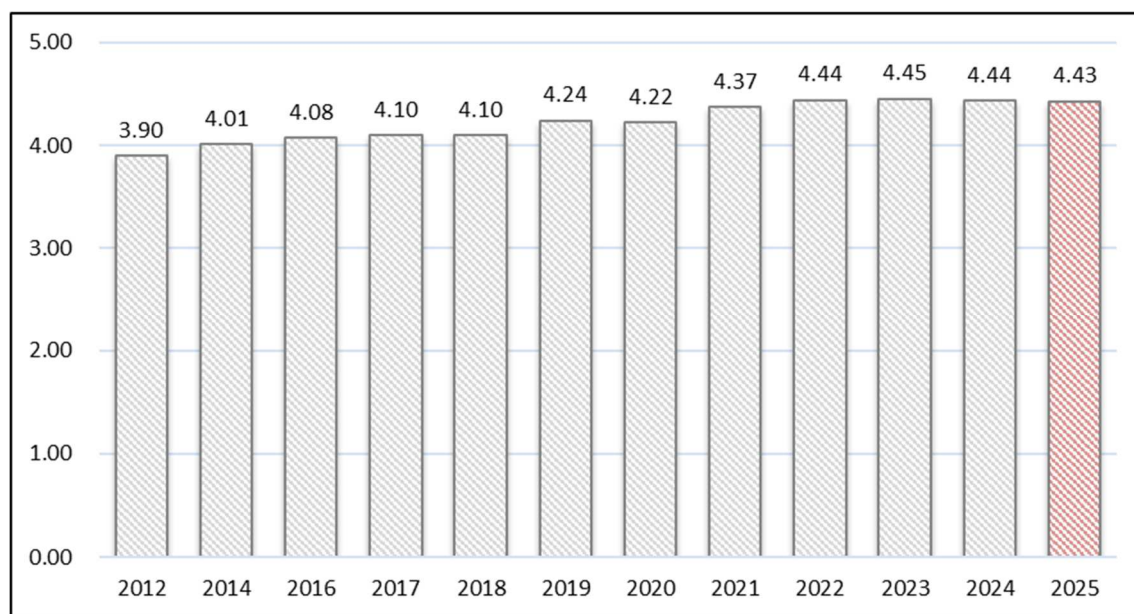


調査対象科目の履修者数は44,437名、回収数は24,265名、回収率は55%であり、前年度(52%)を上回った。授業形態は「面接授業のみ」88.4%、「メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ」11.6%であった。

全質問項目(Q2～Q24)の評価値平均は3.81～4.54の範囲に収まり、前年度と比較して多くの項目で同等またはわずかな上昇が見られた。特に「Q14 よく出席・参加した」は評価値4.54で、前年度(4.52)を上回り、引き続き全項目中で最も高い評価となった。一方、「Q13 積極的に意見や質問をした」は前年度(3.77)から3.81へ上昇したものの、依然として全項目中で最も低い評価である。

総じて、自己学習の時間(Q15:4.11)は前年度(4.10)よりわずかに向上し、出席・参加も良好であった。また、積極的に意見を述べたり質問したりする姿勢にも一定の改善が見られたものの、他の評価項目と比較すると、学生の能動的な授業参加には引き続き課題が残されている。「Q24 授業の総合的満足度」は前年度(4.44)から4.43へとわずかに低下したものの、2012年度(3.90)から継続して上昇傾向が続いており、この高い水準からは天井効果に近づいていると考えてもよい。一方で、低評価項目への継続的な改善が求められる。

図2 総合満足度の推移



1) 教員の授業設計と運営について

教員の授業設計と運営についての質問項目は、Q2～Q12 である。

① 知的刺激

学生の知的好奇心を刺激する授業内容については、「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」(4.43)、「Q4 新しい知識・技術を学べた」(4.49)、「Q6 教材が理解に役立った」(4.40)、「Q11 運営時間・学習量が適切だった」(4.32)と、概ね高評価であった。「Q17 さらに勉強したくなった」は4.23で、前年度(4.22)よりわずかに上昇した。授業内容が学生の知的好奇心を刺激し、新たな興味や関心を喚起する契機となっていることがうかがえる一方、知的刺激や新しい知識・技術の獲得に関する項目と比較すると、継続的な学習意欲をより一層高めるための工夫も必要である。

② 方法・スキル

教授方法・スキルに関する設問では、「Q5 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.31)、「Q7 説明がわかりやすかった」(4.31)、「Q8 質問できる時間や環境があった」(4.28)、「Q9 質問への対応が適切だった」(4.29)、「Q10 出席確認の方法が適切だった」(4.48)など、教員の授業運営スキルが高く評価されている。「Q12 教員の熱意を感じた」も4.42と、前年度(4.41)をわずかに上回っており、授業形態を問わず、教員の授業に対する熱意や授業運営における学生への働きかけが肯定的に受け止められている。

③ 授業の進め方

授業の進行に関する評価では、「Q2 シラバスに沿っていた」(4.45)、「Q11 運営時間・学習量が適切だった」(4.32)と、いずれも高い水準を維持している。Q2は前年度(4.47)をわずかに下回ったものの、大きな変化ではなく、授業内容とシラバスとの整合性や、授業時間及び学習量を含めた授業設計の妥当性は、これらの項目の評価を見る限り、全体として学生から評価されていると考えられる。

④ 主体的な学びの促進

大学教育においては、学生が自ら課題を見出し、考え、行動する「主体的な学び」の姿勢を育むことが重要である。しかし近年、大学のユニバーサル化が進む中で、目的意識が希薄化し、受動的な学習態度が課題として指摘されている。こうした背景を踏まえ、2025年度の授業評価アンケートでは、学生の主体性を測る複数の設問を通じて、授業がどの程度その促進に寄与しているかを検証した。

特に関連性の高い設問は以下のとおりである。

- ・Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」(4.43)
- ・Q9「教員の質問への対応が適切だった」(4.29)
- ・Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」(3.81)
- ・Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」(4.11)

・Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」(4.23)

これらの項目の評価値は、前年度と比較して大きな変動はないものの、全体として安定した水準を維持し、一部では改善も見られた。特に「Q13 積極的に意見や質問をした」は、前年度の3.77から3.81へ上昇したものの、依然として全項目中で最も低い評価であり、学生が授業中に能動的に発言・質問する姿勢には課題が残っている。一方、「Q15 自己学習時間」は前年度の4.10から4.11へ上昇しており、予習・復習を含めた授業外での学習時間が一定程度確保されていることがうかがえる。なお、2019年度以前の調査では自己学習に関する評価値が2.0未満であったが、設問や尺度の違いには留意する必要があるものの、近年は4点台を維持している。

また、「Q17 さらに勉強したくなった」は4.23と高評価であり、授業が新たな関心を喚起する契機となっていることが示されている。これは、「Q3 知的刺激に富んでいた」との関連性が高く、授業内容が学生の知的好奇心を刺激することで、継続的な学習意欲の向上につながっていると考えられる。

主体的な学びを支える環境要因として、教員の熱意も重要な要素である。「Q12 教員の熱意を感じた」は4.42と高評価であり、前年度の4.41をわずかに上回った。2021年度の4.35以降、継続して高い水準にあり、教員の情熱や授業に対する姿勢が学生に伝わっていることは、主体性の育成において肯定的な要因といえる。

総じて、2025年度の結果からは、授業内容や教員の関与が学生の主体的な学びを一定程度促進していることが読み取れる。ただし、授業中の発言や質問といった直接的な能動性には依然として課題があり、今後は授業設計や評価方法の工夫を通じて、学生が安心して授業に参加して意見を述べられる環境づくりが求められる。主体的な学びの定着には、教員の働きかけとともに、学生自身が授業への参加姿勢を振り返り、主体的に学ぶ意義を認識できるようにする教育的支援が不可欠である。

2) 出席率の高低群と授業評価について

本項では、授業への出席・参加率の高低によって学生が授業をどのように評価しているかを分析する。特に、教員の授業方法や教材の有効性、説明の明瞭さ、知的刺激の有無といった項目に着目し、出席率の高い群と低い群の評価傾向を比較した。

分析対象とした設問は以下の4項目である。

Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」

Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」

Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」

Q7「教員の説明がわかりやすかった」

これらは、授業の質を左右する重要な要素であり、学生の出席・参加状況が評価にどのような影響を与えているかを示す指標となる。

2025 年度の調査結果では、出席・参加率の高い学生（Q14 で 5・4 を選択）は、いずれの項目においても平均評価が 4.4 前後と高く、授業内容や教員の対応に対して肯定的な評価を示している。特に「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」では、出席率の高い群が 4.48 という高評価を示し、授業が学習意欲を喚起するものであったことがうかがえる。一方、出席率の低い群（Q14 で 3・2・1 を選択）では同項目の評価が 3.84 であり、両群の間には 0.64 ポイントの差が生じている。

「Q5 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」では、出席率の高い群が 4.36、低い群が 3.67 であり、0.69 ポイントの差が見られた。教員が学生の反応を踏まえて授業を調整していることは、高出席群では肯定的に評価されているが、出席率の低い学生には、その配慮や授業上の工夫が十分に伝わりにくい可能性がある。

「Q6 教材が理解に役立った」についても、出席率の高い群が 4.45、低い群が 3.80 であり、0.65 ポイントの差が生じている。教材の活用は授業の理解を補完する重要な要素であるが、継続的な出席がなければ、教材の位置付けや授業中の説明との関連を十分に把握できず、その効果が限定的になることが考えられる。

「Q7 教員の説明がわかりやすかった」では、出席率の高い群が 4.36 であったのに対し、低い群では 3.66 であり、0.70 ポイントの差が確認された。これは、授業に継続的に参加することで、授業全体の流れや教員の説明の意図、内容相互の関連性を理解しやすくなる一方、断続的な参加では学習内容のつながりを把握しにくくなる可能性を示唆している。

これらの結果から、出席・参加率の高い学生は、授業の構成や教員の対応、教材の有効性に対して肯定的な評価を示しており、授業への継続的な関与と良好な学習体験との関連がうかがえる。一方、出席率の低い学生は、高い学生と比較して授業の質に対する評価が全体的に低い。ただし、その評価差は、2024 年度の 1.05～1.42 ポイントから、2025 年度は 0.64～0.70 ポイントへと縮小した。これは、主として出席率の低い群における評価値が前年度より上昇したことによるものであり、低出席群においても授業内容や教材、教員の対応が一定程度評価されるようになったことを示している。それでもなお、全項目で 0.6 ポイントを超える差が存在しており、授業への継続的な参加が学習体験の質に影響していることには留意する必要がある。

本学では「きめ細かな指導」を教育の柱の一つとして掲げており、出欠調査を通じて欠席傾向のある学生への個別指導を継続して行っている。また、メディア授業（遠隔オンデマンド）においても参加状況を把握し、参加が不十分な学生には個別に参加を促す対応を行っている。今後は、出席率の低い学生に対する早期の把握と支援をさらに強化し、授業への関与を促進することで、学習効果の向上と教育の質の均質化を図る必要がある。学科別の出席・参加率については、次項（2）の表 4-1・4-2 を参照。

表 1 出席率による評価

評価項目	出席・参加率 が高い群	出席・参加率 が低い群	差
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.48	3.84	0.64
Q5.理解度を考慮しながら授業を進めた	4.36	3.67	0.69
Q6.教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	4.45	3.80	0.65
Q7.説明がわかりやすかった	4.36	3.66	0.70

3) 授業形態別による評価

①授業形態について

2025年度の授業形態は、「面接授業のみ」が88.4%、「メディア授業（遠隔オンデマンド）のみ」が11.6%であり、前年度（対面89.5%、遠隔10.5%）と比較して、面接授業の比率がわずかに低下し、メディア授業の比率がやや増加した。ただし、全体としては引き続き面接授業を中心とした授業体制が維持されており、授業の特性に応じてメディア授業が活用されている。

授業評価アンケートの結果を見ると、全体の平均評価値はQ2～Q24の各項目で3.81～4.54の範囲に収まり、概ね高い水準を維持している。特に「Q14 よく出席・参加した」（4.54）、「Q4 新しい知識・技術を学べた」（4.49）、「Q10 出席確認の方法が適切であった」（4.48）など、授業への参加状況や学習成果に関する項目で高評価が得られている。

また、「Q24 授業の総合的満足度」は4.43と、前年度（4.44）とほぼ同水準であり、授業形態の構成比が変化した中でも、学生の満足度は安定している。授業形態別では、面接授業が4.44、メディア授業が4.40であり、面接授業の方がわずかに高かったものの、その差は0.04ポイントにとどまった。これは、面接授業、メディア授業のいずれにおいても、授業設計や教員の対応が一定の教育水準を維持していることを示している。

一方で、授業形態別に各評価項目を見ると、学生の主体的な参加（Q13とQ14）や自己学習（Q15とQ16）、学びの目標達成（Q18）に関する項目では、面接授業とメディア授業との間に一定の差が認められた。授業形態の選択が学生の学習体験に与える影響について、今後も継続的にデータを蓄積し、授業の内容や到達目標との関係を含めて検証する必要がある。

②学科別の授業形態比率

2025年度の学科別授業形態を見ると、共通科目及び心理学科を除くほとんどの学科で、「面接授業のみ」が99%以上を占めており、対面中心の授業体制が継続している。具体的には、日本文学文化学科（99.8%）、こども発達学科（99.6%）、英語コミュニケーション学科（99.8%）、国際学科（100.0%）、服飾造形学科（99.4%）、健康栄養学科（99.6%）、家政福祉学科（99.7%）、看護学科（99.4%）であった。心理学科についても、面接授業が89.9%を占めており、対面を中心としながら、メディア授業（遠隔オンデマンド）が10.1%実施されている。

この結果は、実習や演習を含む授業が多く、対面での指導が不可欠であることを反映している。また、英語コミュニケーション学科や国際学科など、言語運用やディスカッションを重視する学科においても面接授業が主流であり、対話的な学習環境の維持が重視されていることがうかがえる。

一方、共通科目では「メディア授業（遠隔オンデマンド）のみ」が55.7%と半数を超えており、前年度の51.5%からさらに増加した。汎用的な内容や大人数を対象とする授業においては、学生が時間や場所に制約されず受講できる遠隔形式が、授業形態の一つとして定着していることを示している。なお、共通科目のうち外国語科目は99.5%、資格関係科目は100.0%が面接授業であり、共通科目の中でも授業内容や教育方法に応じて授業形態が明確に使い分けられている。

今後は、学科及び科目の特性に応じた授業形態の最適化を図るとともに、メディア授業においても面接授業と同等の教育効果を得られるよう、教育技術の活用と学習支援の充実が求められる。授業形態の選択が学生の学習成果に与える影響について、継続的な検証と改善が必要で

ある。

表2 学科別授業形態

	授業形態(%)					回答数 (名)
	対面のみ	対面と遠隔	メディア授業(遠隔リアルタイム)有り	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他	
共通科目	44.3%	0.0%	0.0%	55.7%	0.0%	4,221
共通科目 (外国語)	99.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	1,703
共通科目 (資格)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1,109
日本文学文化学科	99.8%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	2,058
心理学科	89.9%	0.0%	0.0%	10.1%	0.0%	1,626
こども発達学科	99.6%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	1,693
英語コミュニケーション学科	99.8%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	477
国際学科	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	468
服飾造形学科	99.4%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	1,077
健康栄養学科	99.6%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	4,686
家政福祉学科	99.7%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1,652
看護学科	99.4%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	2,870
全体 (学部共通除く)	89.1%	0.0%	0.0%	10.9%	0.0%	23,640
全体	88.4%	0.0%	0.0%	11.6%	0.0%	24,265

③授業形態による評価の違いの傾向と遠隔授業の課題

2025年度の授業形態は、「面接授業のみ」が88.4%、「メディア授業（遠隔オンデマンド）のみ」が11.6%であり、前年度と比較してメディア授業の比率がやや増加したものの、引き続き対面形式を中心とした授業体制が維持されている。

授業評価アンケートの結果を見ると、授業形態別の総合満足度は、面接授業が4.44、メディア授業が4.40であり、いずれも高い水準であった。また、「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」は面接授業4.44、メディア授業4.39、「Q14 よく出席・参加した」は面接授業4.54、メディア授業4.51、「Q17 さらに勉強したくなった」は面接授業4.23、メディア授業4.19であり、これらの項目における差は0.03～0.05ポイントと小さかった。授業形態が異なっても、授業内容の知的刺激や出席・参加、総合的な満足度については、概ね同等の評価が得られている。

一方、「Q13 積極的に意見や質問をした」は面接授業3.84、メディア授業3.59であり、0.25ポイントの差が見られた。また、「Q15 自己学習の時間を確保した」は面接授業4.13、メディア授業3.99で0.14ポイント、「Q18 学びの目標達成に近づいた」は面接授業4.29、メディア授業4.13で0.16ポイントの差が見られた。メディア授業においては、授業内容そのものや総合的な満足度は面接授業と同程度に評価されているものの、学生が自ら意見や質問を表明することや、自己学習時間を確保すること、授業を大学での学びの目標と結び付けることについては、面接授業よりも難しさを感じている可能性がある。

特にメディア授業（遠隔オンデマンド）では、学習時間を学生自身が管理する必要があり、その学習成果は、学習者の自己管理能力やデジタルリテラシー、ICT環境などに影響される。

また、授業中に教員や他の学生と即時にやり取りする機会が限られるため、疑問点をその場で解消したり、自分の考えを表明したりする機会が少なくなりやすい。「Q8 教員へ質問できる時間や環境があった」（全体 4.28）及び「Q9 教員の質問への対応が適切だった」（全体 4.29）は全体として高評価であったが、メディア授業では、質問方法や回答時期を明確に示し、学生がためらわずに質問できる仕組みを整えることが重要である。

こうした課題に対しては、ICT を活用したインタラクティブな教材設計や、LMS を通じた定期的なフィードバック機能の強化が求められる。また、アクティブラーニングや PBL の考え方をメディア授業に取り入れる際には、掲示板への意見投稿、課題に対する相互コメント、小テスト、振り返り課題などを組み合わせ、学生の学習行動を継続的に促す工夫が必要である。

本学では、メディア授業においても参加状況の把握や個別対応を継続して行っており、参加が不十分な学生には個別に参加を促すなど、きめ細かな指導を実施している。今後は、面接授業とメディア授業のそれぞれの特性を活かしながら、ICT 環境の整備と教育技術の向上を通じて、教育効果の均質化を図ることが求められる。特に、メディア授業においては「孤立させない学び」の設計と、学生の自己管理能力を高め、主体的な学習参加を促す仕組みづくりが重要である。

表 3 授業形態による評価

質問項目	授業形態					全体平均
	対面のみ	対面と遠隔	メディア授業(遠隔リアルタイム)有り	メディア授業(遠隔オンデマンド)のみ	その他	
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.44	0.00	0.00	4.39	0.00	4.43
Q13.積極的に意見や質問をした	3.84	0.00	0.00	3.59	0.00	3.81
Q14.よく出席・参加した	4.54	0.00	0.00	4.51	0.00	4.54
Q15.自己学習の時間を確保した	4.13	0.00	0.00	3.99	0.00	4.11
Q17.さらに勉強したくなった	4.23	0.00	0.00	4.19	0.00	4.23
Q18.学びの目標達成に近づいた	4.29	0.00	0.00	4.13	0.00	4.27
Q24.授業の総合満足度	4.44	0.00	0.00	4.40	0.00	4.43

（２）授業の総合満足度からみた今後の課題

2025 年度の授業評価アンケートにおける「Q24 授業の総合的満足度」は、平均評価値 4.43 であり、前年度 (4.44) とほぼ同水準を維持した。2012 年度の評価値 (3.90) から長期的に上昇し、近年は 4.4 前後の高い水準を維持していることは、大学教育の質向上に向けた取組が着実に進められてきたことを示しており、一定の成果として評価されるべきである。

一方で、総合満足度が安定しているにもかかわらず、個別項目に目を向けると、依然として改善の余地がある領域も存在する。特に「Q13 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、前年度の 3.77 から 3.81 へ改善したものの、2025 年度も全項目中で最も低い評価値となっており、学生の能動的な関与を促す授業設計には課題が残っている。これは、発言や質問を伴う学習活動が授業内で十分に設定されていない可能性や、学生が間違いを恐れずに発言できる教室環境を、さらに整備する必要があることを示唆している。

また、「Q17 この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」(4.23) や「Q15 自己学習の時間を確保した」(4.11) は、前年度からわずかに上昇し、一定の評価を得ている。し

かし、「新しい知識・技術を学べた」(4.49)や「よく出席・参加した」(4.54)などと比較すると低い水準にあり、授業への出席や課題への取組を、授業外での自律的な学習や継続的な探究へと結び付けるための工夫が必要である。

授業形態別では、総合満足度の差は小さかった一方、メディア授業における「積極的に意見や質問をした」「自己学習の時間を確保した」「学びの目標達成に近づいた」の評価は、面接授業を下回った。メディア授業の比率が一定数存在する中で、動画や資料を提示するだけではなく、学生の学習状況を確認し、適時にフィードバックを行い、授業内容とディプロマ・ポリシーや学科の学びにおけるメディア授業の位置づけを示すことが重要である。

さらに、出席・参加率の高低による評価の差も引き続き見られ、出席率の低い学生群では、教員の説明や教材の有効性などに関する評価が4.0を下回っている。ただし、両群の評価差は前年度より縮小しており、出席率の低い学生群における授業評価には改善が見られた。今後は、この傾向を維持しながら、欠席が継続する前の早期段階で学生の状況を把握し、担任、学科、授業担当者及び関係部署が連携して支援する体制をさらに充実させる必要がある。

加えて、授業評価アンケートの回収率にも課題が残る。2025年度の回収率は55%であり、前年度(52%)を3ポイント上回ったことは一定の改善として評価できる。しかし、回答者が履修者の半数程度にとどまっていることから、授業を履修した学生全体の意見を十分に反映しているとは言いきれない。教育の質保証を可視化するための基礎データ収集に向けて、回収率のさらなる向上が必要である。今後は、アンケートの目的や回答結果が授業改善にどのように活用されているかを学生に周知するとともに、授業内で回答時間を確保することや、回答期間及び回答方法を分かりやすく案内することなど、制度的・運用的な工夫が求められる。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

- ・学生の主体的な学びを促進するための授業設計の工夫（アクティブラーニング・PBLの活用）
- ・発言や質問がしやすい教室環境の整備と、教員のファシリテーション力の向上
- ・メディア授業におけるICT活用の高度化と、双方向的・継続的な学習支援の充実
- ・出席率の低い学生の早期把握、個別対応及び学科・関係部署との連携強化
- ・授業評価アンケートの目的の周知と、回収率向上に向けた運用改善
- ・総合満足度の高い水準を維持しつつ、低評価項目を継続的に改善する取組

授業の総合満足度は、教育の質を測る重要な指標であると同時に、学生の学びの充実度を反映するものである。ただし、満足度のみを教育成果と捉えるのではなく、学生が授業を通じてどのような力を身に付け、主体的な学習行動へとつなげたかを併せて評価する必要がある。今後は、総合満足度の維持・向上に加え、学習の質的深化を目指した教育改善と、評価制度の信頼性向上に向けた取組を継続的に推進していく必要がある。

表 4-1 2025 年度 授業評価アンケート各項目平均(共通総合科目)

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通外国語)	全セ (共通資格)
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.45	4.45	4.35	4.47
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.43	4.41	4.30	4.45
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.49	4.49	4.28	4.54
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.31	4.25	4.40	4.30
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.40	4.41	4.29	4.40
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.31	4.34	4.26	4.30
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.28	4.21	4.33	4.23
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.29	4.22	4.34	4.28
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.48	4.43	4.43	4.44
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.32	4.33	4.33	4.35
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.42	4.37	4.40	4.54
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.81	3.74	3.95	3.73
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.54	4.54	4.49	4.52
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.11	4.00	4.08	4.11
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.39	4.40	4.32	4.39
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.23	4.20	4.01	4.22
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.27	4.17	4.03	4.36
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	4.05	4.05	3.91	3.99
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.14	4.12	4.12	4.12
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.12	4.12	4.04	4.12
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.18	4.17	4.03	4.18
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.26	4.22	4.00	4.37
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.43	4.45	4.38	4.44
	回収率 (%)	55%	42%	69%	57%

表 4-2 2025 年度 授業評価アンケート各項目平均(専門科目)

No.	設問	日文	心理	こども	英コミ	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.41	4.54	4.44	4.61	4.32	4.54	4.50	4.43	4.43
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.42	4.50	4.45	4.61	4.31	4.59	4.46	4.42	4.40
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.45	4.56	4.50	4.69	4.31	4.66	4.51	4.50	4.48
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.29	4.37	4.33	4.61	4.11	4.41	4.29	4.30	4.31
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.40	4.49	4.38	4.63	4.30	4.44	4.41	4.42	4.36
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.30	4.36	4.30	4.62	4.14	4.36	4.26	4.33	4.32
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.27	4.42	4.28	4.61	4.11	4.47	4.28	4.25	4.25
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.29	4.40	4.28	4.63	4.08	4.46	4.27	4.27	4.27
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.47	4.53	4.53	4.67	4.27	4.61	4.56	4.44	4.47
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.31	4.39	4.33	4.61	4.22	4.36	4.29	4.30	4.28
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.44	4.47	4.43	4.65	4.33	4.54	4.40	4.42	4.42
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.67	3.66	3.95	4.21	3.60	4.00	3.75	3.81	4.01
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.48	4.50	4.60	4.63	4.37	4.59	4.58	4.53	4.52
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	3.97	4.02	4.23	4.31	3.89	4.27	4.21	4.05	4.23
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.30	4.38	4.44	4.57	4.28	4.48	4.40	4.40	4.40
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.18	4.24	4.28	4.50	4.07	4.40	4.21	4.26	4.31
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.17	4.32	4.37	4.48	4.08	4.44	4.33	4.29	4.34
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.91	4.10	4.14	4.29	3.89	4.15	4.03	4.11	4.17
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.12	4.15	4.21	4.48	4.02	4.10	4.12	4.10	4.23
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.03	4.23	4.28	4.40	4.01	4.11	4.00	4.14	4.23
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.03	4.24	4.29	4.36	4.05	4.28	4.18	4.19	4.25
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.01	4.36	4.38	4.41	4.15	4.43	4.30	4.33	4.34
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.46	4.53	4.42	4.69	4.26	4.57	4.39	4.45	4.41
	回収率 (%)	47%	46%	67%	51%	45%	57%	66%	65%	53%

1) 共通総合科目の課題 (教務部門長 多賀昌樹)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

まず、2025 年度の共通総合科目では、総合満足度 (Q24) は前年度からほぼ横ばいで、大学全体平均 (4.43) を上回る 4.45 で推移した。設問別に大学平均との差を見ると、 $+0.04 \sim -0.12$ の範囲に収まり、授業運営や学習内容については、概ね肯定的な評価が継続しているとみてよい。

ここ 3 年間 (2023~2025) の共通総合科目を構成する 3 群 (共通、外国語、資格) の推移を概観すると、共通は $4.47 \rightarrow 4.46 \rightarrow 4.45$ とわずかに低下したものの、引き続き高位安定圏を維持した。外国語は $4.39 \rightarrow 4.37 \rightarrow 4.38$ となり、前年度の低下からわずかに回復した。一方、資格は $4.49 \rightarrow 4.46 \rightarrow 4.44$ と、2023 年度をピークに小幅な低下が続いているものの、依然として大学全体平均を上回る水準にある。分野横断で確認すると、共通で顕著な高値となったのは、Q14「出席・参加」(4.54)、Q4「新しい知識・技術」(4.49)、Q2「シラバス順守」(4.45)、Q24「総合満足度」(4.45)、Q10「出席確認」(4.43) であった。授業運営や授業構造の安定、提供される学習内容の明確さが評価を支えていると解される。

一方、共通で相対的に低値を示したのは、Q13「主体的な意見・質問」(3.74)、Q15「授業外学習時間」(4.00)、Q19「自分を誇りを持つ力」(4.05) であり、能動性や自己内省に関する学修指標には、引き続き課題が残っている。ただし、前年度と比較すると、Q13 は 3.66 から 3.74、Q15 は 3.95 から 4.00、Q19 は 4.00 から 4.05 へといずれも上昇しており、改善の兆しも認められる。汎用的な学修成果を問う Q18「大学での学びの目標達成」(4.17)、Q22「課題解決力」(4.17)、Q23「社会に役立つ専門力」(4.22) についても前年度を上回ったが、4 点台前半で数値は控えめであり、学部横断という観点に立てば授業で得た学びを他の科目や専門分野、将来の進路へ橋渡しする点については、さらなる工夫が必要である。

外国語では、Q14「出席・参加」(4.49)、Q10「出席確認」(4.43)、Q12「教員の熱意」(4.40)、Q5「学生の反応や理解度への配慮」(4.40) など、授業運営や教員の関与に関する項目が高い水準を維持した。特に、Q5 は前年度の 4.33 から 4.40、Q9「質問への対応」は 4.26 から 4.34、Q6「教材の理解支援」は 4.24 から 4.29 へと改善しており、学生の理解や反応を踏まえた授業運営の成果が表れている。一方、Q2「シラバス順守」は 4.43 から 4.35 へ低下し、Q18「大学での学びの目標達成」(4.03)、Q22「課題解決力」(4.03)、Q23「社会に役立つ専門力」(4.00) は 4 点前半にとどまった。

なお、外国語科目については、2026 年度から英語科目の開講コマ数を 4 コマから 1 コマへ縮減・集約することが決定しており、2025 年度は従来の開講体制による最終年度に当たる。このため、2025 年度の評価結果は、制度変更前の外国語教育の状況を示す基準値として位置付ける必要がある。2026 年度以降は、開講コマ数や履修者構成、授業内容が変化することから、評価値を単純に前年度と比較するのではなく、新たな授業体制の下での教育目標の設定、それに合わせた新たな評価および検証指標の構築をおこなうことにより、限られた授業時間の中において、学生の英語によるコミュニケーション能力や大学での学びに必要な基礎的能力をどの程度育成できているかを検証する必要がある。

②今後の課題

2025 年度は、設問単位では概ね高い評価を維持し、共通では能動性や自己内省に関する項目にも一定の改善が見られた。総合満足度は、共通が前年度とほぼ同水準、外国語がわずかに上昇した一方、資格は小幅に低下した。依然として「主体的な意見・質問」(Q13)や「授業外学習」(Q15)は相対的に低く、知識・技能の習得を学生自身の発信や自律的な学修へつなげる授業設計が課題である。

共通総合科目は、学部・学科を越えた教養の形成、学びの接続、自己理解及び社会との関係を考えることを目的とする科目群である。しかし、現行の授業評価項目は全科目共通の設計であり、学部横断的な学びや専門分野とは異なる視点を獲得する意義を十分に把握できていない可能性がある。各授業において、共通総合科目としての位置付けや到達目標を明確に示し、学生が「なぜ学ぶのか」「専門科目や将来とどのようにつながるのか」を実感できるようにする必要がある。

また、授業外課題、小規模な発表や意見交換、授業後の振り返り等を取り入れ、学生が授業内容について自ら考え、意見を表現し、学びを深められるような授業設計が求められる。メディア授業においても、確認課題やコメント提出、フィードバックを通じて学修状況を把握し、学生を孤立させない仕組みが必要である。

外国語科目については、2026 年度から英語科目の開講コマ数が 4 コマから 1 コマへ縮減・集約されることを踏まえ、新たな授業体制における教育目標と到達水準を明確にする必要がある。従来の内容を単に集約するのではなく、共通教育として身に付けさせるべき基礎的能力と重点内容を整理し、学生の英語力や学修経験の違いにも配慮した授業設計が求められる。2026 年度以降は、2025 年度までの評価値との単純比較を避け、履修状況や学修成果を含めて新たな体制の妥当性を検証する必要がある。

授業評価アンケートの回収率は、共通 42%、外国語 69%、資格 57%であり、特に共通は大学全体の 55%を大きく下回った。メディア授業や大人数授業が多いことも踏まえた上で、低回収率であった共通科目を中心に回答運用の改善を図るため、アンケートの目的と活用方法を学生に示すとともに、授業内での回答時間の確保や manaba course による案内の徹底など、回答しやすい運用を検討する必要がある。

全学教育センターの廃止後は、大学・大学院評議会における「共通総合科目のあり方」の検討メンバーを中心に、共通総合科目、外国語科目及び資格関係科目の課題や授業展開などで優れた取組を共有し、改善につなげる仕組みを構築する必要がある。各分野の特性を踏まえつつ、知識・技能の獲得と、主体的な発言、授業外学習、自己理解、課題解決等の学修成果とのギャップを縮めることが、次年度の重点課題となる。

2) 日本文学文化学科の専門科目の課題（学科長 小野 真嗣）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025年度の授業評価アンケートにおいて、Q24 総合的な満足の数値は、全体が 4.43 であるのに対して、本学科は 4.46 であり、この数値は全学平均をやや上回ったということである。学科の過去 3 年間の数値と比較すると、4.47(22 年度)→4.51(23 年度)→4.49(24 年度)→4.46(25 年度)となり、本学全体の総合満足度の推移が 4.44(22 年度)→4.45(23 年度)→4.44(24 年度)→4.43(25 年度)であることから、4 年間本学科の授業に関する評価は概ね良好であったといえよう。しかし、学科自体の総合満足度自体は 4.51(23 年度)→4.49 (24 年度) →4.46 (25 年度) とわずかながらではあるが低下傾向にあることは看過し得ない問題といえる。

総合満足度が全体よりやや上回ったものの、学科の総合満足度自体が低下傾向にある要因を検討すると、個別質問において全体を上回った質問は Q12 のみであり、24 年度の Q2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・20 や 23 年度の Q2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12 と比較するとかなり減少しており、22 年度の Q3・11・12 に近いといえる。このことは、総合満足度の変化にも現れており、前述したように 24・23 年度総合満足度に比べて 25 年度の総合満足度は低く、22 年度の総合満足度に近い。25 年度の総合満足度は近年で最も低く、このままでは本学全体の総合満足度を下回る可能性が高いといえる。

②今後の課題

まず、一点目は、前年度まで全体平均を上回っていたことが多かった Q2～12 への対応である。これらの質問項目は教員の授業運営に関するものが多い。つまり、教員個々がシラバス執筆の段階から前年度の反省を踏まえたシラバス作りを行い、シラバスに沿いながら学生が新たな知識・技術等を学ぶにふさわしい教材を使用し、運営時間 にも気を配り、わかりやすい説明を心掛けつつ、熱意をもって知的刺激に富んだ授業を行っていくことを念頭において授業運営を行うということを、もう一度再確認する必要があるといえる。

二点目は、例年、大学全体の平均を下回っていることが多い Q13～24 に関してである。こちらは授業への学生の能動的な取り組み姿勢や、授業によって得られたスキルを問う質問項目が多い。前者に関しては、3 年次から 3 つの専攻に分かれる本学科の学びの領域が広いということが、この結果に反映していると考えられる。すなわち、Q13 に示されるような学生自身の主体的な行動への評価も含め、自分の学びたい領域以外の授業に関して、積極的に学ぶ姿勢が不十分であることがうかがわれる。本学科では 3 つの専攻の学びが融合して学科の学びを形成していくことを標榜しているが、その点をもう一度検討し、各々の授業に取り入れていく必要があると考えられる。また、後者については、文学・文化・芸術について学ぶ授業を設計している本学科の場合、実学的な意味での「社会に役立つ」が実感しにくいことが結果に反映していると考えられる。この点で重要なことは、自分が学んだことが社会でどのように役立つのかという視点を獲得できていないということである。このことは大学を卒業して社会人となる時、大学で学んだスキルを活かした就職先を見つけることができていないということにも繋がる。この点については抜本的な改善が必要不可欠であろう。その一環として PBL や地域連携活動における学修成果を活かした企画を実施するなど、学科全体での取り組みを強化することを検討していきたい。

3) 心理学科の専門科目の課題（学科長 佐瀬竜一）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025年度の心理学科における授業の総合満足度（Q24）は「4.53」となり、2024年度の「4.50」からさらに高い値となった。学生が心理学科の学びおよび学びを通しての自身の成長に対して、一定の高い価値と満足感を見出していると言える。

各質問項目を詳細に分析すると、心理学科の教育目的とディプロマ・ポリシー（DP）の達成度に直結する項目で高い値を示した。具体的には「Q21.人を理解し自分を表現する力」（4.23）、「Q19.自分を知り誇りを持つ力」（4.10）、「Q22.課題を解決する力」（4.24）、「Q23.社会に役立つ専門力」（4.36）となっていることから、学生自身が自らの成長を実感していることが示された。

これらの成果は、心理学科が掲げている DP が、日々の授業を通じて着実に学生に身につけている証左である。心理学科の特徴の1つである「わかる・ためす・できる」という体験的学びのサイクルが有効に機能していると考えられる。日々の授業や授業外で入力する授業支援システム（manaba course の respon 等）による学習成果についての言語表現、実験、調査、観察、臨床実習といった実践的なアプローチを通じて、学生は単に知識を頭で「わかる」だけでなく、自ら「ためす」ことで「できる」ようになるプロセスを心理学科では目指している。このことが、自身の専門性に対する自信と授業への高い満足度に寄与していると思われる。

また、「Q8.質問できる時間や環境があった」（4.42）や「Q9.質問への対応が適切だった」（4.40）といった教員のサポート体制に関する項目も高い値であった。学科教員が対面でのやり取り、授業支援システム（manaba course）での双方向可能なフォロー（個別指導コレクション）など、一人ひとりに合った手段を用いて丁寧に学生に向き合い、専門的な学びをきめ細やかに支援していることの成果であると考えられる。

一方で、「Q13.積極的に意見や質問をした」は「3.66」にとどまっており、他の項目と比較して依然として低い水準にある。心理学科を目指す学生には、他者の内面を深く慮るゆえに自己主張や発言に対して慎重になる傾向がここにも見受けられる。これは配慮深さという長所の裏返しでもあるが、協働的な学びを深めるための課題と捉えることもできる。

②今後の課題

学生の主体的な参加姿勢をさらに引き出し、「Q13.積極的に意見や質問をした」（3.66）や「Q15.自己学習の時間を確保した」（4.02）といった項目を向上させることである。そのためには、学生が失敗を恐れずに発言、挑戦できる心理的安全性の高い教育環境をさらに構築するとともに、令和の日本型学校教育で重視されている個別最適な学びと協働的な学びの観点も踏まえて、「目標に向かって能動的に自分の思考・感情・行動を調整しながら学習を進める自己調整学習力」、「自らの思考を言語化し、他者と協働しながら専門的な課題を解決する力」を高める授業や教育を展開していく必要がある。一方で、学生の成長に関する個人差や学びのペースを考慮して、授業支援システム（manaba course）、Microsoft365 などの ICT 環境も活用しながら、「学生一人ひとりと丁寧に向き合い、専門的な学びをきめ細やかに支援する」という心理学科の良さをさらに伸ばしていくことが求められる。

また、2026年度より開始した新カリキュラムが進行する中で、現行カリキュラムの学生が卒業まで不安なく学びを完遂できるよう、引き続き丁寧な履修指導を行っていく必要がある。同時に、

2026 年度に 3 名の新規教員が心理学科に着任したことも踏まえて、学科全体としてどのような能力を育成しているのかという「学生の成長に関するストーリー」を改めて丁寧に言語化、共有しながら、教員間の連携をさらに強化して組織的な指導力向上に努める必要がある。

加えて、2025 年度のアンケート回収率は通年で 46% となり、2024 年度の 50% から低下する結果となった。このことに関しては「授業評価アンケートの結果を活用して学科の教育や授業をどのように良くしていこうとしているのか」についての具体的なアクションを心理学科 FD にて検討し、取りまとめた検討結果を教員間で共有すると同時に学生に開示することを通して、学生に「授業評価が自分たちにとって有意義なものである」と認識してもらうことで回収率の向上を図っていききたい。

4) こども発達学科の専門科目の課題（学科長 大神優子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025 年度授業アンケートの各項目を全体平均と比較すると、誤差の範囲の僅差も含めて、23 項目中 17 項目が全体平均を上回り、1 項目が同値、5 項目が下回っていた。2024 年度は 23 項目中 21 項目が全体平均を上回っていたことから、全体平均に対する相対的な高さはやや縮小した。もっとも、全体平均を下回った項目の差はいずれも 0.01～0.02 程度と小さく、学科全体の評価が大きく低下したとは言い難い。総合満足度は、2024 年度の 4.45 から 4.42 へわずかに低下し、全体平均 4.43 を 0.01 下回った。

経年変化の特徴としては、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」が、2024 年度の 3.88 から 3.95 へ上昇したことがあげられる。過去数年間の 3.66、3.75、3.88 から継続して上昇しており、学生の主体的な授業参加が定着しつつあると考えられる。Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」は、2024 年度と同じ 4.23 であり、比較的高い水準を維持した。

全体平均を比較的大きく上回った項目としては、前述の Q13 のほか、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、Q21「この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」、Q23「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」が挙げられる。特に Q21 は全体平均を 0.16、Q23 は 0.12、Q22 は 0.11 上回っており、2024 年度に引き続き、対人理解や自己表現、課題解決、専門性に関する学習成果が本学科の特徴として示された。

これらのことから学生が授業に参加し、自己学習の時間を確保することが、専門性や課題解決力の向上につながっていると考えられる。一方、教材の有用性、説明のわかりやすさ、質問への対応などの授業運営に関する項目は、全体平均とほぼ同程度ではあるものの、一部でわずかに下回った。今後も、学生の主体的な学びを支えながら、授業内容の理解を促す教材や説明方法を継続的に工夫する必要がある。

②今後の課題

本学科の回収率は 67% であり、全体平均の 55% を上回っているものの、2024 年度の 73%、その前年度の 80% から低下が続いている。対面授業内で回答時間を確保していても、欠席者や未回答者が一定数いることが考えられるため、授業内で確実に回答を促す方法や、回答状況の確認方

法、欠席学生のフォローについて、改めて検討する必要がある。

また、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は本学科では上昇傾向で学科の特徴となる項目ではあるが、他の項目と比較すると依然として低い。今後は、小グループでの意見交換、授業内での短時間の振り返り、匿名で質問できる方法などを活用し、発言や質問に負担を感じる学生も参加しやすい環境を整える必要がある。

5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題（学科長 河内山有佐）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

総合的な満足度（Q24）について、2022年度以来4年連続で全学科の中で1位（4.69）となったことは、大変喜ばしい限りである。近年、英語という言語や科目の人気の全国的に激減している傾向は、本学科の受験者数減少や定員割れという厳しい数字にも如実に表れており、強い危機感を持っている。しかし、このような状況下にあっても、在籍している学生たちが本学科の提供する英語や英語圏に関連する授業に意義を感じ、学習意欲を維持してくれていることは救いである。このことは、Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」（4.61）の評価や、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」（4.57）、Q17「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」（4.50）の数値に現れていると思われる。

また、本学科の良さとして学生たちが挙げる「小規模学科ならではの環境」や「教員が学生に寄り添う姿勢」が、今回も各項目に反映されたと考えられる。とりわけ、Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」（4.60）、Q9「教員の質問への対応が適切だった」（4.63）、Q12「この授業から教員の熱意を感じた」（4.65）などの数値が比較的高いのは、日頃からの教員個々の丁寧な指導姿勢を学生たちが受け止めてくれている表れではないだろうか。こうした授業や担当教員の運営面における評価については、オープンキャンパス等での学科紹介でも、来場者に学科の実態として丁寧にお伝えしていきたい。

同時に、学科の専門科目として今後さらに改善・充実させていくべき項目として、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」（4.48）や、Q22「この授業により、『課題を解決する力』が向上した」（4.36）などがある。これらの項目も一定の評価は得ているものの、学生の将来に直結するより実践的な能力育成に向けたアプローチには、まだ工夫の余地が残されている。また、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」（4.31）については、学科内の他項目と比較すると依然として最も低い数値に留まっている。定員確保に向けて厳しい状況が続くからこそ、学生の主体的な学修時間をいかに増やすか、授業内外での課題設定や学びへの動機付けをさらに模索し、今後も学生と共に地道に学びを深めていく学科でありたいと考えている。

②今後の課題

ここ数年、継続して掲げている最重要課題は、アンケートの回収率を80%以上に引き上げることである。2025年度の回収率は51%に留まっており、全学科の中では平均的な位置にあるものの、目標には遠く及ばない。今後も引き続き、アンケートに回答していない学生たちが半数近く存在するという事実を強く意識する必要がある。声を大にして明確に意見を伝えてくれないサイレント・マジョリティの学生も含め、日頃の授業内でのリアクションや細かなフィードバックに

これまで以上に教員は敏感に反応し、より細やかな授業を展開できるよう心がけていきたい。
2028年度の国際学科との統合を見据えたカリキュラムのスリム化プランも進行中であるが、これまで培ってきた「教員の熱意」や「丁寧な授業の質」を地道に維持し、在学生の学びをより充実したものにしていくことが、最終的には学科への信頼回復や、受験者数の動向・収容定員の安定にも直結する不可欠な要素となるであろう。

6) 国際学科の専門科目の課題（学科長 金丸裕志）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

国際学科の専門科目全体の授業評価アンケート結果について、まずその総合満足度をみると、「Q24.授業の総合満足度」の項目は通年目で9番目、前期科目で10番目、後期科目で6番目に高かった。いずれも全項目中、中ほどの順位であり、可もなく不可もないという評価である。項目ごとに見てみると、評価が高かった項目としては、最も高かったのが「Q14 よく出席・参加した」(4.37)、次が「Q12.教員の熱意を感じた」(4.33)、3番目が「Q2.シラバスに沿っていた」(4.32)であった。Q12は教員に対する評価であり、この項目が2番目に高い評価を得ているのは喜ばしい。また4番目に「Q3.内容は知的刺激に富んでいた」(4.31)、5番目に「Q4.新しい知識・技術を学べた」(同じく4.31)といった学生の学びに対する評価が来ているのは、これも高く評価できるであろう。またとくに総合満足度の高い群において、「Q12.教員の熱意を感じた」(1番目、4.48)、「Q3.内容は知的刺激に富んでいた」(2番目、4.47)、「Q4.新しい知識・技術を学べた」(4番目、4.45)といった項目が高い位置に来ているのは、正当な評価を得ているといえる。

他方、評価の低い項目として、最も低かったのは「Q13.積極的に意見や質問をした」(3.60)、次に「Q15.自己学習の時間を確保した」(3.89)、同順位の「Q19.自分を誇りを持つ力が向上した」(3.89)、「Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した」(4.01)、「Q20.基礎学力と文章力が向上した」(4.02)といった項目があがっている。なかでもQ13やQ15は学生の学びに対する主体性や積極性を示すものであり、これらの点において評価が低いのは検討の余地がある。

②今後の課題

今後の課題としては、上記のように、今回のアンケートで評価の低かった項目、そのなかでも「Q13.積極的に意見や質問をした」および「Q15.自己学習の時間を確保した」といった学生の学びに対する主体性・積極性についての項目でもっとも評価が低くなっている点に着目すると、まずは自己学習に時間を費やすような授業づくり、すなわち予習や復習を必要としたり課題をこなす必要がある授業内容へと発展させる可能性を探る必要があるかもしれない。また「Q20.基礎学力と文章力が向上した」という項目の評価が低い点でいると、これは学生の学力向上の実感がないということを示しており、基礎的な内容のリメディアル的な内容の授業が求められているといえよう。

また、総合満足度の高い群に限って見たとき、「Q17.さらに勉強したくなった」(4番目)、「Q18.学びの目標達成に近づいた」(5番目)、「Q9.質問への対応が適切だった」(6番目)といった項目が低いことが気になる。満足度の高い群はそれなりに学習への意欲も高い層であると考え、そのような意欲的な学生がさらなる学習意欲を掻き立てるような(Q17)、また学習における達成感を得られるような(Q18)内容の授業が求められていることがこれらの点に示されている。ま

たそれらの意欲的な学生に対し、適切な質問対応ができていないことは憂慮すべき点であり、各教員の改善が求められる。

7) 服飾造形学科の専門科目の課題（学科長 水野一枝）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025 年度の学科の総合的満足度は 4.57 と大学全体の平均 4.43 より 0.14 ポイント高かった。この状況は 2022 年度から続いている。その要因として、大学全体の平均より評価が 0.16 ポイント以上高かった質問が 9 項目（Q3「内容は知的刺激に富んでいた」、Q4「新しい知識・技術を学べた」Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」、Q9「教員の質問への対応が適切だった」、Q13「積極的に意見や質問をした」、Q15「自己学習の時間を確保した」、Q17「さらに勉強したくなった」、Q18「学びの目標達成に近づいた」、質問 Q23「社会に役立つ専門力」が向上した」）であったことが考えられる。

Q8・Q9 が高評価であることから、教員が学生の質問に対し適切に対応する環境と体制をとっていたことが示唆される。また、Q3・Q4 が高評価であったことは、教員による専門分野の教育内容が充実していただけでなく、Q13、Q15、Q17 の自主的な学修に繋がっている可能性も考えられる。Q18、Q23 で学びの目標に近づき、社会実装が想定できたことも Q8 と Q9 の高評価に関連している可能性があり、知的刺激や新規性のある学びを教員が積極的に推進していたことが窺える。

総合満足度と相関が高かった項目は、Q5「理解度に合わせて授業を進めた」(0.69)、Q6「教材が理解に役立った」(0.68)、Q7「説明がわかりやすかった」(0.73) であり、服飾造形学科の教員が教材を工夫し、学生の理解度や習得の進捗状況を踏まえた、学生が理解しやすい授業を展開していることが示唆される。

②今後の課題

Q20「基礎学力と文章力が向上した」(4.10)、Q21「人を理解し自分を表現する力が向上した」(4.11) については、昨年と同様に 2025 年度も大学全体の平均より低く、4 年連続で改善できていなかった。4 年連続で改善できなかった理由には、本学科の専門科目に実習や演習が多く、基礎学力と文章力を向上させる機会が少ないことが考えられる。演習や実験、講義においても文章で表現する機会を積極的に取り入れるだけでなく、フィードバックを積極的に行うことで、学生自身が学修効果を確認できる指導をしていく必要がある。

総合満足度の高い群では Q20 および Q21 も含め、すべての質問項目が大学全体の平均より高かった。一方、総合満足度の低い群ではすべての質問項目が大学全体の平均より低く、特に Q5、Q6、Q7 の授業を理解する項目では評定平均値が約 1.5 以上、Q20、Q21 が 1.1 以上の違いがあり、著しく低かった。総合満足度の低い学生では、授業を理解しきれていないことが、全体の平均を低下させていることが窺える。Q20、Q21 を改善するには、授業の理解度を確認し、理解しきれていない場合は、理解できる補足の説明等、丁寧な対応を併行して進める必要があると考えられる。

8) 健康栄養学科の専門科目の課題（学科長 杉浦令子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025 年度の健康栄養学科専門科目に対する授業の総合満足度（Q24）の平均値は 4.39 であり、2024 年度の 4.31 から向上した。総合満足度との相関が高かった項目は、Q7「説明がわかりやすかった」（相関係数 0.64）、Q5「理解度に合わせて授業を進めた」（0.60）、Q17「さらに勉強したくなった」（0.59）、Q18「学びの目標達成に近づいた」（0.58）、Q11「運営時間、学習量が適切だった」（0.57）であった。これらの結果から、教員が学生の理解度を把握しながら分かりやすい授業を実施し、学習意欲や学習成果の実感につながる授業運営を行ったことが示唆された。専門知識をわかりやすく伝える工夫に加え、学生の主体的な学びを促す教育実践が、総合満足度の向上に寄与したものと考えられる。

また、総合満足度の高い群における回答分布では、Q14「よく出席・参加した」（4.62）、Q10「出席確認の方法が適切であった」（4.60）で特に高い値を示した。健康栄養学科では、従来から欠席状況の把握や学生支援を教職員が連携して行っており、こうした継続的な取組が学生の授業参加意識の維持・向上につながっていると考えられる。また、Q18「学びの目標達成に近づいた」（4.41）、Q23「社会に役立つ専門力が向上した」（4.37）、Q16「試験や課題に積極的に取り組んだ」（4.45）も高い値を示しており、専門職として必要な知識・技能の修得に対し、学生自身が一定の達成感を得ていることがうかがえた。

②今後の課題

健康栄養学科では、管理栄養士として必要な高度な専門知識・技術に加え、他者と協働する力やコミュニケーション能力の育成を重視している。その観点から見ると、Q13「積極的に意見や質問をした」（3.75）は他の項目と比較して低く、依然として学生の主体的な発言や授業参加を促す工夫が必要である。また、Q21「人を理解し自分を表現する力が向上した」（4.00）、Q19「自分を誇り誇りを持つ力が向上した」（4.03）は 2024 年度より改善しているものの、専門知識の修得に関する項目と比較すると相対的に低い評価となっている。今後は、実験・実習・演習でのグループワークや発表の機会をさらに充実させ、学生の主体性や自己表現力、課題解決能力の向上を図っていききたい。また、アンケート回収率は 60%から 66%へ改善したものの、依然として全学生の意見を十分に反映できていないといえない。引き続き回答率向上に向けた工夫を行い、学生の意見をより効果的に教育改善へ反映させていきたい。

2025 年度の結果からは、学生が管理栄養士として必要な専門知識や技術の修得について高い達成感を得ていることが確認された。今後はその強みを維持しながら、学生の主体性、自己表現力および他者と協働する力をさらに高める教育を推進し、社会で活躍できる管理栄養士の養成に努めていきたい。

9) 家政福祉学科の専門科目の課題（学科長 水野一枝）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2025 年度の学科の総合満足度は 4.45 であり、全体平均値と同等であったが、2022～2024 年度の約 4.5 より 0.06 低下した。項目別では、Q15「自己学習の時間を確保した」（4.05）、Q20「基礎学力と文章力が向上した」（4.10）の 2 項目が大学全体の平均より約 0.05 低下していた。

2024 年度より Q15 と Q20 は 0.1 低下していた。自己学習の時間を確保できず、基礎学力と文章力の向上を実感できないことが総合満足度の低下の要因の一つと考えられる。さらに、Q15 と Q20 以外の質問項目は大学全体の平均より微かに低い、または高く、2024 年度の結果と比較すると 1 項目以外の値は僅かではあるがすべて低下していた。項目は特定できないが、全体的に評価が上昇していないことが、満足度の低下と関連している可能性が考えられる。

一方、大学全体の平均との比較では、Q19「自分を知り誇りを持つ力が向上した」(4.11) と Q23「社会に役立つ専門力が向上した」(4.33) が本学科で 0.06 以上高かった。資格取得を目指す学生が多いことから、教員が専門力を向上させるだけでなく、誇りを持つ力や自信へと繋げる丁寧な教育を行っていることが窺える。

総合満足度との相関が 0.6 以上であった項目は、Q3「内容は知的刺激に富んでいた」、Q7「説明がわかりやすかった」、Q9「質問への対応が適切だった」、Q11「運営時間、学習量が適切だった」、Q12「教員の熱意を感じた」、Q17「さらに勉強したくなった」、Q18「学びの目標達成に近づいた」、Q23「社会に役立つ専門力が向上した」の 8 項目であり、説明がわかりやすいだけでなく、教員の質問への対応や熱意、学生が目標達成に対する実感を持つことが関連していることが示唆される。

②今後の課題

僅かではあるが、総合満足度が大学の全体平均より低く、2022 年～2024 年と比較しても低下していた。総合満足度の低下には Q15 と Q20 が関連しているが、この 2 項目については総合満足度の高い群と低い群でスコアが異なる。総合満足度の高い群では大学全体の平均より高いが、低い群では Q15 は 0.90、Q20 は 1.14 低かった。総合満足度が低下した要因には、総合満足度の高低により評価が異なることが考えられる。さらに、総合満足度と相関が高かった Q3、Q9、Q7、Q9、Q11、Q12、Q18、Q23 についても総合満足度が高い群では大学全体平均より高いが、低い群では 1.00～1.23 低かった。授業の内容や質問への対応について理解しきれておらず、目標の達成を実感できない学生が全体の平均を低下させている可能性が考えられる。資格を取得するための科目が多いため、難易度の高い内容も含まれていることが想定される。Q5「理解度にあわせて授業を進めた」が、総合満足度の低い群では大学全体の平均より 1.11 低いことから、理解度を確認しながら進め、理解しきれていない場合は丁寧な対応が必要と考えられる。

今年度の FD では授業の工夫について教員間で情報共有を行った。この FD での情報も活用し、わかりやすい説明と質問への対応を改善することが課題であると考えられる。

10) 看護学科の専門科目の課題（学科長 大堀昇）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

看護学科の総合満足度（Q24）は、毎年上昇し 2024 年度は 4.42 となり、2025 年度は 4.41 と横ばいの状況であった。しかし、大学全体の総合満足度 4.43 と比較すると、まだやや低い結果である。項目別で得点 4.35 以上と高かった項目は、2024 年度の Q2、Q3、Q4、Q6、Q10、Q12、Q14、Q16、Q24 の 9 項目と同様であった。高得点だった項目の内容を見てみると、Q2「シラバスに沿っていた」、Q3「知的刺激に富んでいた」、Q4「新しい知識・技術を学べた」、Q6「教材は理解に役立った」、Q10「出席確認方法が適切」、Q12「教員の熱意を感じた」、Q14「出席・参

加」、Q16「積極的に取り組んだ」、Q24「総合的に満足」であった。要因として、対面授業のため直接学生と教員とのやり取りのある授業形態だったことから、知的好奇心を直に刺激され、出席状況や課題等への取り組みが向上し高得点につながったものとする。教授する側も対面授業とともに授業支援システム（manaba course）や動画配信サービス（CLEVAS）、その他の ICT 環境を上手に活用したり、シミュレーションを取り入れたりして授業方法を改善した結果と考えられる。

また、2024 年度まで 3 点台後半で推移していた Q13「積極的に意見や質問をした」が、2025 年度は 4.01 と 4 点台に上昇していた。授業内でグループワークや発表などのアクティブラーニングを取り入れる努力をしてきたことの成果と考えられる。

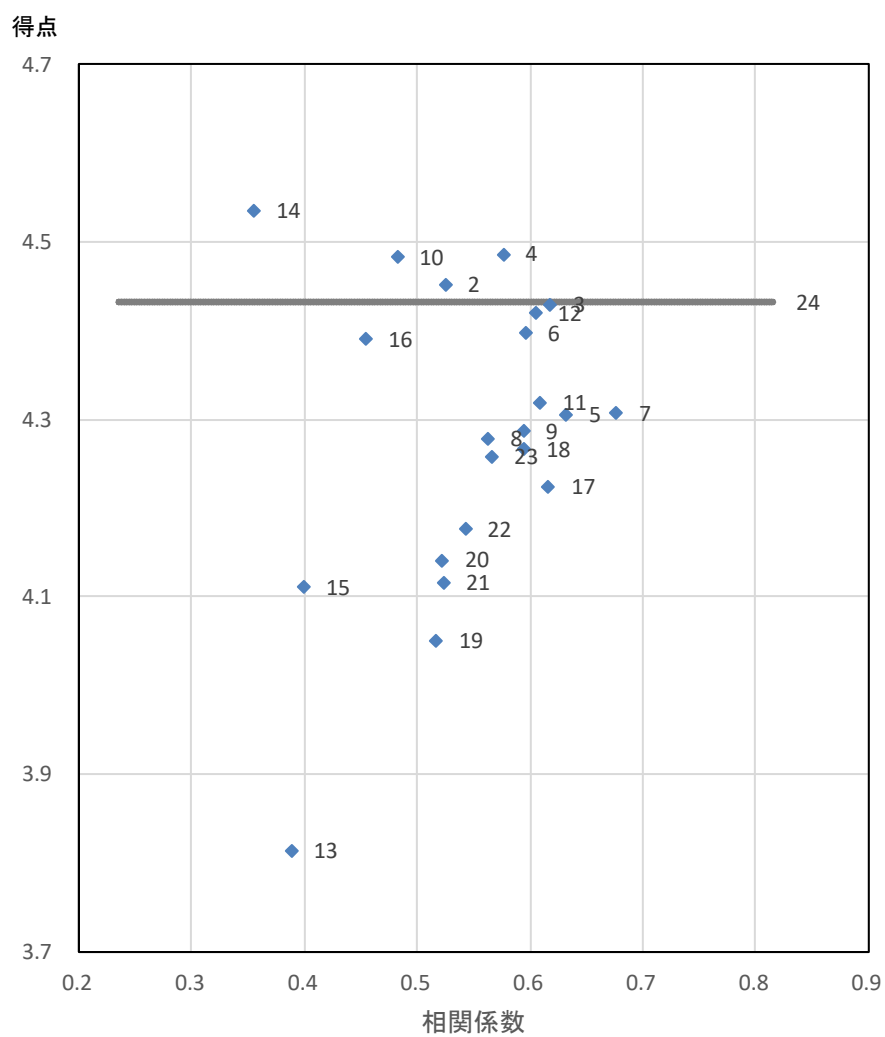
全体平均点より 0.05 点以上上回った項目は、Q13「積極的に意見や質問をした」、Q15「自己学習の時間を確保した」、Q17「さらに勉強したくなった」、Q18「学びの目標達成に近づいた」、Q19「自分を誇りを持つ力が向上した」、Q20「基礎学力と文章力が向上した」、Q21「人を理解し自分を表現する力が向上した」、Q22「課題を解決する力が向上した」、Q23「社会に役立つ専門力が向上した」の 9 項目であった。これらの項目が意味するものは、本学科のディプロマ・ポリシーにある「倫理観」「自律性」「専門性」「地域・社会的貢献性」「多様性の理解」「継続する力」の内容であり、目指す教育が実現されつつあるものと考えられる。

全体平均点より 0.05 点以上下回った項目はなかったが、Q2、Q3、Q4、Q6、Q8、Q9、Q10、Q11、Q14、Q24 の 9 項目は 0.01～0.04 点低い結果であった。中でも、Q6「教材が理解に役立った」、Q11「運営時間、学修量が適切だった」は、全体平均点より 0.04 点低く改善の余地のある項目であるとする。Q6 については 4.36 点と高得点ではあるが、全体平均点と比較すると低いことから、用いる資料やスライドの文字や図の大きさや鮮明さなど、学生にとってわかりやすい教材・教具のさらなる工夫や改善が必要である。また、Q11 については、クラスサイズが大きく 90 分の授業時間ではきめ細やかな個別対応にまで至らなかったり、専門知識に関する学修内容が多かったりすることが関係していると考えられる。Q6 での教材・教具の工夫・改善ともに効率的・効果的な学修量となるよう、学修内容の精選も検討していく必要があるとする。

②今後の課題

年々得点が上昇しているものの、全体平均点と比較し低い項目もあった。クラスサイズが大きいことや専門知識に関する学修内容の多さから、一方的な授業方法となりやすいことが要因と考えられる。今後の課題として、2025 年度に引き続き、教員と学生とのコミュニケーションを図り、双方向の授業展開ができるよう工夫していく必要がある。また授業への満足度を上げるためには、学生の達成感や充実感が味わえるよう工夫することも大切であると考えられる。そのために、事前学修内容や学修内容の精選を検討するなど、継続して学生の興味・関心を促す取り組みをしていきたい。

図3 授業の総合満足度(Q24)と他項目との相関
※プロット脇の番号が質問番号を示す



5. 資料

参考：2025 年度授業評価アンケート設問

※Q2～Q24 の⑤～①は評価点数となります。⑥は点数に含まれません。

		強く そう思う	そう 思う	どちら でもない	そう 思わない	全く そう 思わない	答え たくない・ 該当しない
Q1	この科目の授業開講方法を選択してください ① 対面授業 ② メディア授業（遠隔オンデマンド）	-					
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	⑤	④	③	②	①	⑥
Q7	教員の説明がわかりやすかった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q9	教員の質問への対応が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q10	出席確認の方法が適切であった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	⑥
Q14	この授業はよく出席・参加した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	⑤	④	③	②	①	⑥
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q19	この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ⑥該当しない・答えたくない	⑤	④	③	②	①	⑥
Q25	Q この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも入力してください	自由記述					

※マナバコースでの選択肢は仕様上、1「強くそう思う」～5「全くそう思わない」、6「答えたくない」としています。

2025(令和 7)年度 授業評価アンケート報告書

2026(令和 8)年 9 月

編集 和洋女子大学 大学・大学院評議会

担当 多賀昌樹 高梨一彦

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111